

をひもで固くゆわえて、やっとの思いで汽車が出発した。これで日本に帰れると笑顔が見えるようになったが、汽車はのろのろと南に向かつて走り、奉天駅を過ぎ、小さな駅にとまり、一晩待機することになった。

朝早く、満人数名が銃を持ち、品物検査と目ぼしい物を、全部取上げた。そのうえ、汽車の燃料(石炭)を買わねば汽車は走らせないと無茶をいつてきて、皆の金を強引に奪っていった。なんにもなくなった私達、どうにか錦州にたどりつき、集結地のコロ島より引揚船に乗り、長崎の佐世保港に上陸し、懐かしい故郷に帰り着いた。家族六人、よく帰れたものと思う。衣食住、何一つない乞食同然の生活が始まったが、満州と違い、生命に危険のないだけ、心の安らぎがあった。

世紀の終戦

群馬県 山崎 さとの

昭和十七年四月、当時満州国、北部露東県に大陸の花嫁として、生まれて初めて海を渡り、北滿の国際都市ハルピンより更に北の露東で新世帯を持ち、西も東も又言葉もわからず、町に生活用品を買うのにも手振り手真似でようやく買い物をして、社宅に帰る時は馬車(マーチヨ)に乗って帰宅した。

そんな生活をしているうちに、昭和十八年四月、長男が誕生したが、氣候風土に馴れないためか、急性肋膜炎となり、ハルピン市の国立病院に入院した。乳幼児がいるので、派出婦をやとい、長期にわたる病院生活を送り、スタートより大変でした。

言葉もようやく通じ、氣候にも馴れて、暮し易くなってきたそんな矢先、主人は現地召集で突然関東軍に入隊し、子供二人をかかえ留守宅を守っているうち終

戦となり、主人はソ連に抑留され、いつ帰るかもわからなくなり、どこにいるのかも全然連絡が取れない。

「治安が悪い、田舎町では危険だ」と主人の会社より避難するよう通達を受け、直ちに子供を連れて、何も持つことも出来ず、無蓋車に乗車、ハルピンへ向かう途中、駅々に匪賊が貨車を銃声で脅かし、貨車を乗りかえさせられたり、生きた心地もなくなり、唯おどおどと子供をしっかりと抱きしめていた。

運良く軍の貨車がきましたのでそれに連絡し、やつとのおもいで目的のハルピン国際運輸の青年隊舎に仮住まいとして落ちつくことになり、そこでの生活が始まり、食料は会社には一時はありましたが、毎日のようにソ連軍の兵士が貴金属その他なんでも取り上げていき、男は全員廊下に立たされ、頭に両手をあげて見ているだけの悲しさは生まれて初めての経験でした。

そんな時、兄達と合流して新京に着いたが、今度は食料を確保しなければ生活ができない状況となり、義姉に子供を見て貰い、中国人の家に働きに兄と二人で仕事をしました。

そのうちに発疹チフスになり、やむを得ず仕事は退職して寝ているうちに幸いにして高熱も下がり、一日と元気になり、今度は街頭で物品販売をして生計を立てました。

そんな時、新京には、開拓団など奥地に住んでいた日本人が続々集まってきた。中には、自分の子供を捨てて来た人も大勢おりました。その時さいわいにも中国人に親、又は知人が依託されて成人した人達が中国残留孤児となり、現在でも肉親をさがし続けて四十有余年です。中には、広い中国のはてに静かに眠っている親子も数いるのでしよう。

それから、大都市に集結の途中、匪賊から身を守るためとはいえ、泣き叫ぶわが子の口の中にタオル等を押し込み窒息させたとか、罪の重さに愕然となり、自殺やら、又は狂人となり、無意識な行動をしたり生地獄でした。